信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　村上龍 『五分後の世界』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　http://twitcasting.tv/skypebookclub
YouTubeLive　https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

村上龍

『五分後の世界』

第 280 回のツイキャス読書会の課題図書は、村上龍　の『五分後の世界』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

メルマガ読者　I.K さん

「自分にとっての戦い」

この本を通して、ちゃんと生きるとはどういうことかを考えさせられた。

今の日本の平和は独力ではなくアメリカのお陰で保たれていると思う。アメリカ様がバックにいて守ってくれてるお陰でロシアや中国と言った大国が迂闊に攻め込んでこれないのだ。

けれど庇護の中で守られることに馴れてくると自分のことを自分で決めることに無頓着になってしまうのではないか。自分達で決めなきゃいけないことを他人に委ねていると、人間として脆くなっているのではないか。アンダーグラウンドではこの事に強く反発している。

身近に考えてみれば私も、家と職場の往復で、生きると言う営みを職場に捧げてしまっている感がある。そんな自分にとって戦いとはなんだろうかと考えてみたら、稲作ではないかと思った。親の代で途絶えてしまった稲作をもう一度再開するのがよいのではと思った。生きるのに必要な食料について積極的に関わることが今の自分にできる精一杯だと思った。

（おわり）

メルマガ読者　hoyo さん

スチールドラゴン 2000

最初の印象はとても良かった。何故若いうちにこの小説を読んでいなかったのかと少し後悔したが、その気持ちは読み進めているうちにだんだんと薄れていった。

内容としては、ジェットコースターとも言うべき怒涛の展開で、戦闘描写も緻密で大変面白いと思う。

作者の、日本人によるゲリラ戦を徹底的に描きたいという気持ちがこれでもかと伝わってきて、その部分はとても素晴らしいし、他に類を見ない出来になっていると思う。

だが、どうしたって辻褄の合わない部分が出てきて、それが気になってしまった。

私なりのツッコミどころを箇条書きしてみたので、注釈として付けたい。
あまりに長すぎるので、読みたい人だけ読んでいただければと思う。

もちろん、私が読み取れていなかったり、前提知識が足りず勘違いしている部分も多々あることだろう。
だがそれにしたってツッコミどころが多くないか？と思わずにはいられない。戦闘描写は緻密なくせに、心理描写や、背景世界がハリボテでは臨場感もあったもんじゃないだろう。

結局、この小田桐自身が、主人公であると同時にただの消耗品であると、言わざるを得ない。

彼には、元の世界に戻る理由も無ければ、戻れない理由すら用意されていないのだ。（例えば、借金取りに追われているとかでもいいだろう）
しかも、徹底的に状況に流されているだけだ。それではジェットコースターに載っている客と何ら変わるところがない。
彼に出来たことと言ったら、リップを塗ることと、マフィアを罵ることと、時計の針を合わせることくらいだ。
私には、そんな彼の「その後」を積極的に知りたいとは思わなかった。

ハインラインのような、カチッとしたサイエンスフィクションと比べてしまう私が悪いのかも知れないが、私はこれをサイエンスフィクションとは呼べない、そう思った。

そもそも、村上氏の小説自体が、消耗品ということなのだろう。
消耗品としては抜群に優れていると思う。派手で日本人の愛国心もくすぐるし、事実楽しい。けど、それだけだ。

そういって私は自分の遅れている時計を、一分進めた。

（おわり）

注釈：5 分後の世界で感じた疑問点（ただのイチャモン）

・小田桐が 5 分後の世界に迷い込んだのは何故？
・5 分という数字は、バートランド・ラッセルの「世界五分前仮説」から取ったものだそうだ、それなら本当の世界がどちらなのかを疑問に思わないのは何故？
・仮に元の（いわゆる我々の）世界こそが幻というなら、小田桐の存在は何？
・国連軍が敵でアンダーグラウンドが味方と決めつけるのは何故？
・トンネル工事の時に命を狙われただけで敵認定するのは無理があるのでは？
・ロケット砲ならともかく、フルオートのグレネードランチャーで戦車って壊せるんだ……　ふ～ん（疑いの目）
・教科書を読んだだけでハイそうですかと納得するのはおかしい。少しは疑え。
・自殺者もノイローゼもいないなんて完全にプロパガンダじゃねーか、そういうとこも疑え。
・『向現』の力で自殺もノイローゼも全部防げます、ということかも…（それはそれで欺瞞だが）
・地下に潜ってて 20 万人しかいないのに、科学技術が国連より優れているのは何故？
・エネルギー問題はどうなってる？　原子力？
・ワカマツはなぜスラムでコンサートなんてやったんだ？ホントに日本国の宣伝ってだけ？　リターンよりリスクの方が莫大だろう。
・しかも暴動を誘因するトリップ・ミュージックまで流してる。
・暴動自体が目的だった？そんな描写ないが。
・思わぬ暴動が起こるからハラハラドキドキするんであって、ダイナマイトに火を付けますと事前に断ってから爆発させてもスリリングでもなんでもない。結局、白線の内側におはいり下さい、と同じレベルじゃないか。
・マフィアあっさり引き下がりすぎ。ワカマツを拉致したいんじゃないのかよ？
・暴動時にマフィアが何も仕掛けてこないのも不自然。
・小田桐の帰る目的は？ただ帰りたいってだけ？
・元の世界に戻れる保障も無いのに危険地帯に行くのは何故？他の軍人も何故止めようとしない。
・元の世界に戻れる根拠もない、実力もよくわからないお荷物の主人公を危ない非国民村まで連れて来てくれたミズノ少尉は聖人ですね。
・他の部隊員がお荷物の主人公を厄介者扱いして隊長に食い下がらなきゃドラマも糞も無いんだわ。
・そういう軋轢を乗り越えて仲間になっていく描写が無きゃ、最期にこの世界へと残るという意志を示しても、取って付けただけにしか見えない。
・ミズノ少尉の主目的は偵察任務とのことだが、偵察する軍事的な意味があまりよくわからない。トンネルの防備のため？
（一応、国連軍の部隊はいたけど、あとは山と非国民村しか無いんだが？）
・仮に元の世界に戻るゲートが非国民村の近くにあるのだとして、それを調査する科学者を派遣しないのも腑に落ちない。アンダーグラウンドの国力から考えて、別の世界があるって言うなら、是が非でも我が物にしようとするのでは？
（別の世界への行き来が自由となったら、史上最高のトンネルなんだが）

（注釈おわり）

メルマガ読者　玉井さん

ペレとはなんだったのか。

本書『五分後の世界』読後の乃公、愚にもつかぬ雑感四題以下に編み出したり。

▼あらすじ:
ちょい悪オヤジの小田桐はある日ひょんなことからパラレルワールドの日本にワープして様々な女性に淡い下心を抱く一方でペレの身体能力に翻弄されつつも旧日本軍残党のゲリラ戦士として敵対する国連軍との戦闘に小田桐自ら巻き込まれていく痛快ドタバタ異世界ファンタジー活劇。

▼雑感①　～戦闘に関する描写～:
本書は戦闘シーンがやけに細かく、特に第 4 章「戦闘」、第 8 章「非国民村」は印象的である。

▼雑感②　～ワカマツのコンサートに関する描写～:
第 7 章「暴動」におけるワカマツのコンサートのくだりもやけに細かい(幻冬舎文庫,P.229～P.237)。演奏者ワカマツはアンダーグラウンド(＝日本国)の誇りという存在にも関わらず、演奏手法に電気ピアノ、シンセサイザー、ボンゴ、アフロキューバン、ポリリズム、シンコペーションを用いており、それって 70 年代マイルスデイビスそのままやんけ！　欧米か！　と思った。(なお、読書会主宰者はこの場面を「デヴィット・ボウイのコンサートの様だ」と称しておりこの見解も言い得ていると思う。)

▼雑感③　～第 5 章の概要～:
第 5 章「アンダーグラウンド」において小田桐が目にした「(5 分後の世界における)現代社会の教科書」は、本編約 15 ページに渡って第二次大戦後の日本について延々と説明されているが、教科書が進むにつれ内容が決意表明と化しており、これをまとめると「日本国民は生命を尊重しながら日本人としての主体性をもって生きるべし」となり、つまり「欧米か！」の精神である。

▼雑感④　～第 5 章の不可解な点～:
前述の教科書内に 《「……帝国陸軍なき後もトンネルを基点にゲリラ戦を展開し、国体の護持に努めよ」》P.138 と、司令官から国民兵士向けに指令があり、以降、攻勢に転じてゲリラ戦術が世界から高く評価されているとあるが(P.138～P.139)、この一連のくだりには違和感を覚える。というのも、前述引用部分で 《国体の護持に努めよ》 としながらも、その実、《陛下は六六年まで旧東京の仮御所に、国連軍の監視のもと、住んでおられましたが、現在はスイスにうつられています。》P.137 という状況が不自然極まりないからであり、要は、主権の所在によって区別される国家が成立していない(≠国体)にも関わらず、こんなスムーズにアンダーグラウンドが進歩するものなのか？　欧米か？　という疑問だけが残った。でもまあ「国体」という言葉自体、広義に解釈可能なのでもしかしたら別の、例えば民族的な示唆があったのかもしれない。

といったことを考えながら、本書にインスパイアされた私は『転生したらペレだった件』というライトノベルを執筆中である。

以上

（おわり）

メルマガ読者　さくらさん

『五分後の世界』 感想文

　何だかよく分からなかった。と読み終わって思いました。
　生なましい表現もあるけど現実味がなくて戦争ごっこのような感じがしました。
　主人公の小田桐が全然危ない目に合わないので小田桐が見ている夢みたいな小説なのかな？とも思いました。
印象に残った場面は

　（引用はじめ）

小田桐もすぐにその後ろに倒れ込んだが砂利に顔が触れる寸前に、機関銃弾が跳ねとばした小石が額をかすめた。やられた、と小田桐は思った。血が肩を濡らし目に入り込んでくる。当たったのは石だ、立て、ここにいたらやられるぞ、クリハラが耳許で怒鳴り、襟を掴んで小田桐を引きずり起こした。　（幻冬舎文庫　P.268）

　（引用おわり）

　これまでは危機感がなくてゲームの中のような感じがしたので少し気になりました。
　でも、やっぱり意味が分からない事が多くてどういう感想を持っていいのか分からなかったです。
　小田桐も元の世界に戻りたいという気持ちが伝わってこなかったので、元の世界はあまり良くなかったのか、別の世界に行ってみたいという願望があったのかなと思いました。

　ちょっと気味悪い場面もあったけど、「野火」に比べたらそんなに恐ろしく感じなくて、不思議な作品だったなと思いました。

　（おわり）

信州読書会　主宰　宮澤さん

『五分後の反動的世界』

たまにテレビで、北朝鮮の喜び組の美女たちが映ると、昔の（と行っても 50～60 年代の）日本映画の女優みたいな雰囲気だなあ、と私は思う。顔は、80 年代アイドルみたいである。露出が少なくて、清潔感のある天然美女。
例えば、河合奈保子や南野陽子みたいな。

メイクの仕方や服装もあるのだろうが、北朝鮮の喜び組を見るたびに、なんともいえない不思議な郷愁に襲われる自分がいる。ああいう感じの日本人が芸能界にいなくなった。
小田桐がマツナガ少尉に感じたものは、北朝鮮の喜び組に私が感じるものと同じだと思う。

（引用はじめ）

整った顔立ちだが、思わず振り返ってしまうような美しさではない。それなのに妙に胸が騒いだ。制服のせいでもなく、マツザワ少尉の態度が恐ろしく自然でまともなために、逆に強烈に女を感じてしまうのだ。化粧やしゃべり方や一つ一つの仕草に、女の属性を強調したり、媚を示すところがまったくないので、逆に種としてのメスだけが持つ柔らかな何か、感触や匂いや分泌物などを抽象化した何かが漂ってきた。（第 5 章　P.151）

（引用おわり）

ファシズム的な統制の危険な香りというのは、実は、こういうところにある。

そのような危険な香りは、例えば、ベルンハルト・シュリンクの『朗読者』の主人公ハンナにもあったものである。
ハンナは、ラーゲルの職員で元ナチスだった。彼女は、戦後もナチスの規律を生きていた。
統制社会というのは、自然でも、まともでもないのだろうが、焼き鳥に串を打つように、群衆に規律を強制する。

その規律は、種としての女性の特徴を覆い隠すがゆえに、余計にそれを想像させてしまうのだ。

秋元康先生プロデュースの『坂道シリーズ』が、架空の高校の制服を着せてアイドル活動をさせるというのは、統制されたものに、逆に醸し出されてくる「何か」を狙ってのことだろう。
歌やダンスが下手で個性がなくても、フォーメーションダンスやらせれば、何かになるのである。

整然と秩序だった組織が、とんでもない悪夢を現実化するというのは、ナチスドイツの行ったホロコーストを見れば明瞭である。政治権力が、生産性向上のために、社会に規律を与えようとすると、人間は強制的に同一化され、ヒューマニティーが失われる。しかし、やっかいなことに、ヒューマニティーが抑圧されたところに立ち現れてくる、非人間的な美しさがあるのである。

愛国心とか忠誠とかは、美しいのだが、その美しさには、猛毒が潜んでいる。規律から現れる美しさは、非人間的であるがゆえに、規律に従わない者たちの生命を蔑ろにする。
マツナガ少尉の魅力というのは、画一化や没個性に関わる危険なものである。

だから、坂道シリーズ的なものも、私は、よくないと思っている。
いっときの平手友梨奈がセンターだった頃の欅坂 46 のダンスは、ファシズム的な効果を狙っていた。
ああいうファシズム的効果をエンタメにしのばせてくるのは悪質であり、危険である。
しかし、ファシズム的兆候がいかに危険かを、人に説得するのは、難しい。
皆、エンタメだから良いじゃんと思っている。
自由人である小田桐が、だらしなかった母を憎み、アンダーグラウンドの兵士に感動するくらい感傷的だからである。
（また、非国民のみすぼらしさやだらしなさへの嫌悪感は、排外主義への一歩手前である）

GHQ の 3S 政策（セックス・スポーツ・スクリーン）によって、骨抜きにされた大日本帝国を、地下活動でとりもどそうとする『アンダーグラウンド』の精神は、バブルの時代なら、当時の日本人への警鐘だったろうが、20 年代には、単に反動的であり、ファシズム一歩手前の権威主義的振る舞いである。

坂道シリーズも喜び組も批判すべきであり、ああいうことはやったらダメなのである。

（おわり）